

名誉顧問のコモンセンス

茄子の味

その2:「令和の米騒動」

5 オピニオン 13 版

享

社説

Editorials

コメ政策の転換

増産の実現へ道筋示せ

政府がコメの増産にかじを切る。半世紀にわたる生産調整に終止符が打たれれば、農政の大転換となるが、増産の実現は容易ではない。持続可能性が危ぶまれる稲作を立て直し、主食の供給を安定させるために、具体的な道筋を示す必要がある。

コメ余りによる米価の下落を防ぐため、政府は1970年代以降、生産量を抑えて価格を維持する減反政策を続けてきた。2018年に廃止したが、主食用米から飼料用米や麦、大豆などへの転作に補助金を出す形で事実上の減反は続く。しかし、23年の猛暑による不作を機に始まったコメ不足と米価の高騰は、減反政策の限界をあらわにした。

盤を立て直すのに、遅まきながら増産に転じる政策の方向性は妥当だ。

27年度に予定する水田政策の見直しに向けて具体策を詰める。政策を前に進めていく力が、政府に問われている。

関係閣僚会議では、農林水産省が高騰の要因と対応策を自ら検証した結果を報告。高温障害による精米後の歩留まりの悪化、訪日客の増加による需要増、家庭での消費拡大などの要因を挙げた。生産量が需要を下回ったことが高騰の原因と、ようやく認めた。

需給の両面で実態把握が十分だったのに、「コメは足りている」と誤った説明を繰り返して、備蓄米放出の判断も遅れた。根拠に乏しい不確かな情報を発信して米価の上昇を招き、家計を圧迫した責任は重い。猛省してほしい。

情報収集力や分析の甘さだけの問題か。消費者目線が足

りず、生産者の側に偏重した配慮が失政を招いた面はなかったか。後手に回った対応の検証を深めたい。正確な統計の整備も喫緊の課題だ。

増産の実現には課題が山積みだ。コメ農家は高齢化や担い手の減少に歯止めがかからない。耕作放棄地も広がり続け、田んぼに戻すのも簡単でない。農地の大規模化を進めるにも、中山間地での集約には限界がある。増産の出口として輸出の拡大も掲げるが、価格競争力の向上が欠かせず、生産コストを大幅に引き下げる必要がある。長期視点の制度設計が求められる。

増産で供給が増えれば米価は下がる可能性が高い。生産基盤を守るには農家の所得を補償する政策も要る。ばらまきにならない補償の範囲や財源について、生産者と消費者が互いに納得できる解を野党も交えて見いだすときだ。

2025・8・11

「茄子を食べる」の意味 あるとき、報徳先生は茄子(なす)を食べていました。ふと、首をかしげました — 「いま、夏なのにこの茄子は秋の味がする」。これは大変です。先

生は、「今年は、穀物や野菜や果物が生長する夏の時期が来なくて、直ぐ秋になる予兆だ」と感じたのです。それで、村々に命じて、「凶荒が来るぞ。飢饉に備えて、米穀ではなく稗(ひえ)を蒔け！」と伝えました。この茄子の味の予兆のおかげで、この村の百姓たちだけがこの秋の飢渴から免れることができたのです。

それで、この「名誉顧問のコモンセンス」シリーズの「茄子の味」とは、「一を聞いて十を知る」ことをいいます。それも、吉・凶の内の「凶」を先んじて知ること、来るべき凶事を予想して、前もって防御策を講じ、未然に災害や不幸を防ぐことをいいます。報徳先生が、夏に茄子を食べて秋の飢餓を予想したように、メディアも、私たちも、常にいま起きていること、すなわち、今年の季節が、「夏という成熟期がなくて、とつぜん、収穫期の秋に飛んでしまうこと」を知り、これから起きる「凶事」(飢饉)を予想して、未然に防ぐことを考えるべきなのです。農業に於いては、先ず、自然の推移を予想しなければなりません。天候が暑いか冷えるか、雨が多いか少ないか — これを予想することが第一です。そして、農民たちの意欲です。農業一条で利潤を上げて暮らしていけるか、いけないか。後継者は育っているかいらないか。お米や農作物の流通や販売網は整備されているかどうか。社会における労働者たちに主食の米が芳醇に支給されているかどうか。小・中学生の給食は満足されているか — などなど、農業を管理する施政者たちに必要とされる能力は多岐に渡ります。

二つの異なる解釈 でも、この報徳先生の夏の茄子と秋の茄子を食べ比べる例は、時に、誤解されることがあるので要注意です。夏の茄子は美味しいのですが、秋の茄子も美味しいのです。「秋茄子」といっても悪いことばかりではありません。よく言われる、「秋茄子は嫁にくわすな」という格言には、二三の異なった解釈があります。まず、「嫁いびりの象徴」としての意味です。姑が、「特に美味しい秋茄子は嫁に食べさせるのはもったいないから喰わせるな」という意地悪な意味で使われます。また、その反対に、嫁を気遣う意味で、嫁を大切に思う気持ちを表す解釈もあります。「茄子には体を冷やす効果があるため、涼しくなってきた秋に嫁が食べると体調を崩すといけないから食べさせないように」という嫁を気遣う気持ちや、また、秋茄子には種が少ないことから、「子宝に恵まれないことを心配して食べさせない」という解釈もあります。「二律背反」、どうも罪作りなことわざです。でも、真意は、実際に嫁に対する舅(しゅうと・妻の父)や姑(しゅうと・妻の母)の気持ちはこの二種類あると言いたいのでしょう。ことわざは、時に、人の判断を惑わせます。困ったものです。ここでの報徳先生の夏茄子と秋茄子の例は、「夏にあるべき豊かな味の茄子が秋の最盛期を過ぎた熟れた茄子の味がした」と言うだけのことで、茄子を食べて、季節感の差を述べた言葉です。特に、「秋茄子が不味い」と言っているわけではありません。この「名誉顧問のコモンセンス」シリーズの「茄子の味」でも、「一を聞いて十を知る」ことに主眼があるのでからご理解ください。

朝日の社説：令和の米騒動

米価の急騰 今年は、庶民にとって大変な年でした。お米の値段が急騰したのです。米の需給問題は、「令和の米騒動」と言われるぐらい庶民の暮らしを危うくしています。今年の銘柄米の平均価格は前年の2倍超の4285円でした。原因は、政府が行ったお米の減反政策のせいであることが分かってきました。冒頭に載せた朝日の社説もそう説明しています。信じて良さそうです。では、減反政策から米の増産に政策を切り替えればお米の値段は下がっていいわけですが、なかなかそう簡単にはいきません。理由は、社説の通りです。

報徳先生は、「農業は国の大本(おもと)だ」といっています。【『二宮翁夜話』134頁】 その論旨は次のようです —

さて諸職業中、また農をもって元とする。なぜならば、自ら作って食ひ、自ら織って着るという道を勤めるからだ。この道は一国の者がことごとくしてもさしつかえのない職業である。このような大本の職業が賤しいのは根元であるがためである。およそ物を置くのに、最初に置いた物が必ず下になり、後に置いた物が必ず上になる道理であって、すなわち、農民は国の大本(おもと)であるから賤しいのだ。

すべての事は、天下一同に、①これをしてさしつかえのない職業こそ大本なのだ。②役人が頭貴であるといって、全国民がみな役人になったらどうだろうか。必ず立ち行かない。③兵士は貴重ではあるが、国民がことごとく兵士になれば、同様に立ち行かない。④工は欠くことのできない職業ではあるが、全国民がみな工になるならば、必ず立つことができない。⑤商となるのもまた同じだ。しかるに、農は大本であるから、全国の人民がみな農となっても、さしつかえなく立ち行くことができる。してみれば、農は万業の大本たることは、これで明白だ。

農本主義 報徳先生は、「役人や兵士や工作員や商人などに比べて、国中の人間が全員・農民になっても良い」と言います。これを「農本主義」や「農民主義」(peasantism)と言います。むろん、健全な社会を営むには、役人も、兵士も、工作員も、商人も、それぞれ、一定数は必要なのです。でも、報徳先生の時代の江戸時代においては、「幕藩体制維持」のために農業と農民の保護が最優先でした。

[幕藩体制維持のために] この原理を明らかにすれば、長年の迷妄がとけて、大本が定まり、末業はおのずから判明する。ゆえに、天下の者すべてがなしてさしつかえのあるのを末業とし、さしつかえのないのを本業とするのは、公明の論ではないか。だから、農は本であり、厚くしなければならず、養わなければならない。

農業は割を食う 報徳先生のこととは、すでに時代が代わり、明治維新以降は、産業革命による工業化の結果、農村社会の解体が進みます。国の大本が、農業から経済と工業へと替わったのです。それゆえ、21世紀の日本では、農業は割を食っています。

諸説を紹介

現在、米の供給面では、①長年に渡る減反政策、②気候変動や自然災害の頻発、そして③農業従事者の高齢化による労働力不足が生産に大きな影響を及ぼしている。一方で需要面においては、④消費者の食生活の多様化や ⑤人口減少に加え、⑥インバウンド[外国人の訪日]需要の急増が需給バランスを一層複雑化させている。

さらに在庫管理も重要な課題である。急激な需給変動に対応するためには ⑦十分な在庫を確保する必要がある。万が一、在庫管理を誤ると短期的な ⑧供給不足や ⑨価格の急騰を引き起こし、消費者や流通業者に大きな影響を与えるリスクがある。

こうした複合的な要因を踏まえ、需給バランスを安定させるためには、①生産面に限らず、②消費側の意識変容や ③物流インフラの整備、さらには柔軟な政策が求められている。④在庫管理の強化に加え、迅速かつ的確な⑤需給調整体制の構築が不可欠である。

令和の米騒動と呼ばれる米需給の混乱について、①長年にわたる減反政策の影響や、②気候変動・ ③高齢化・ ④インフレによる供給力の低下、⑤食生活の多様化と ⑥人口減少

による需要の構造的変化、さらには ⑦短期的な需要増加とそれに伴う ⑧在庫逼迫が複合的に絡み合い、現在の不安定な米市場が形成されている。

……など、など、「令和の米騒動」は、上記のように色々な現象が生じ、その原因も多岐に渡っています。報徳先生の「農は国の本」という考え方では、いまさら、とても間に合いません。この資本主義の世の中の「コメ不足」という秋茄子の味は、いかな報徳先生が春茄子を食べても味わえなかったことでしょう。

農本主義が建前

貧乏人は麦を食う これは、報徳先生をからかっていっているのではありません。今でも、庶民にとっては、「農本主義」が建前なのです。日本人は、「米」によって生きているのです。いま、現在、庶民には、主食の米は足りていないのです。米不足と米価高騰が、庶民を苦しめています。これはいつの時代にあっても、あってはならないことなのです。このことについては、1840年の報徳先生の死後、丁度百年の1950年の国会で論じられました。「米がなければ、貧乏人は麦を食え」と言った吉田内閣の当時の大蔵大臣の池田勇人が参議院予算委員会で行った国会答弁(1950年・昭和25年12月7日)が、新聞の見出しでは「暴言だ」として紹介されました。

緊急避難 この池田の答弁に対するマスコミの「暴言」扱いについては、秘書官だった大平正芳は、「米が足りなければ、うどんとか麦で我慢するほかない」という意味であると理解を示していて、作家の瀧澤中は「無理せず儉約すれば一時的にお金がなくても生活していける、程度の意図しかない」と著書で書いています。池田の次女の紀子は、当時の池田家も麦飯を食べていたと明かしています。答弁の真意は別にしても、何れも、池田答弁については、報徳先生と同じ現実主義的な考えによるもので、コメがなければ、馬鈴薯でもパンでも食べれば良いのです。庶民の緊急避難としてだれでもやっていることで、あまり意に介するにおよびません。

売るほどある しかし、米価が去年よりも2倍近く値上がりして多くの人が買えないでいる折も折(2025年5月)、時の農林水産大臣が地元の「政経セミナー」で講演し、「私はコメは買ったことはありません、正直。支援者の方々がたくさんコメをくださる。売るほどあります、私の家の食品庫には」と述べました。安定した供給に責任がある政治家が発言する言葉とは思えません。これこそ、まさに暴言です。今回の「令和の米騒動」は、社説が指摘するように、主に政府の減反政策が原因であったと思われます。生産よりも需要が上回ったコメ不足と生産者側に考慮した結果の米価の高騰が米騒動を引き起こしたとされるのですから、まさに、政府の責任が問われます。

施政者の役割

農村と農民の生活の責任者であった報徳先生は、彼らを守るために、常に最善を尽くしました。

【『二宮翁夜話』百九十八話「救荒」・181頁】

駿河(静岡県)駿東郡は、富士山の麓で雪水がかかる土地であるから、天保七年の凶荒はことさら酷かった。領主の小田原侯(大久保忠真)は、この救助法を江戸で翁に、「米・金の出し方は家老の大久保某に申しつけたから、小田原に行って受け取るように」と命ぜられた。翁は、即刻出発して夜行で小田原に着き米金を請求されたところ、家老・年寄の評議がまだ決まらず、久しく待つうちに昼になった。みなは弁当を食して、そのあとで評議をしようとした。そこで翁は言われた。「飢民はいま死に迫っているのにそれを救う評議

がまだ決まらないで、弁当を先にしてこの至急の評議を後にするのは、公議を後にして私を先にするものです。今日のことは平常のことと違って数万の人民の命に関する重大な件です。まずこの議を決して後に弁当を食すべきです。この議が決しなければたとえ夜に入っても弁当を用いてはなりません。謹んで評議を決められたい」と述べられたので、もっともなことだと出席の者たちは弁当を食することを止めて評議に及んだ。そしてただちに用米の蔵を開くことに決まって、これを倉奉行に伝えた。ところがまた倉奉行は、開倉の日は月に六回ときまっているので定まった日のはかみだりに開倉した例がないと言って開かない。また大いに議論したが、倉奉行は家老の会議のところで弁当云々の論があったことを聞いてすぐに倉を開いたという。これはみな翁の至誠によるものである。

子供の給食が先き 農民を救うために報徳先生は、身命を賭しました。施政者の責任の取り方としては、素晴らしい話です。今回の米騒動の責任者はだれで、いまは、どうしているのでしょうか？ 麦飯弁当を、家族そろって食しているのでしょうか？ また、騒動の真の原因についても厳しく問われなければなりません。事は、生産者の農民の貧困にだけ及ぶものではありません。すでにして、温かいご飯の給食を楽しみにしている小・中学生たち、日々の労働の原動力として米飯を食している職業人たち、季節がきて超高値の秋茄子の値にとつぜん驚いている家庭の主婦たち — すなわち、消費者である国民全般に関わることです。

施政者の対処法

さて、この「米騒動」を鎮圧するには、時の施政者自身が、すべての国民、すなわち、コメを増産する生産者である農民と美味しいコメを安定して食べる消費者である市民の両方から信頼され、支持されなければなりません。現在の政治家たちは、安倍政権時代の「モリカケサクラ問題」（森友学園問題と加計学園問題と桜を見る会問題）をはじめとして、最近の「裏金問題」なども解決していません。その上でのさらなる今回の「米騒動」の勃発（ばっばつ）です。

施政者の心得 また、報徳先生は、国内で騒動が起きたときの施政者の心得について、次のように述べています。これが、「秋茄子の味」で、前もってなすべき対処法です。

翁はこう言われた — 「村里の衰えを復興するには、財[税金]を投じなければ人々が動かない。その財を投ずるには投じ方がある。それを受ける者が恩に感じるようであれば益がないものだ。天下は広いから善人は少なくないが、悪習を洗いおとし、廃村を復興することができないのは、いずれもその方法が誤っているからである。すべて、村の長となっている者[代議士]や、事業の中心になる者[役人]は、必ずその村の富者である。たとえその人が善人で、よく仕事をするとしても、自然、[誤解をまねく]うな]驕奢(きょうしゃ:ぜいたく)な生活をしているから、恩を受ける者[人民]は恩と思わず、ただその奢侈(しゃし:ぜいたく)をうらやんで、自分の驕奢を止めず、分限を忘れるという過失を改めないから、益がないのだ」。

先生は、ここでも、施政者の無責任さだけでなく、恩を受ける側の人民の傲慢さにも触れています。容赦はありません。

具体的な対処法 報徳先生は、優れた施政者の具体的な対処法として、いくつか実例を上げます。ここがまた、実践家として、指導者として、先生の凄いところです。

「そこで村の長となろうという者[政治家と役人と村の代表]は、①謙虚で誇らず、②俟約で奢(おご)らず、③慎んで分限を守り、④余財は人に譲って、⑤村の害を除き、⑥村益

を起こし、⑦窮乏を救えば、村人はその誠意に感じて、①驕奢を欲する心も、②富貴をうらやむ思いも、③救済や減税を欲する気持も、ことごとく消えて、①勤労を嫌わず、②粗衣・③粗食を嫌わず、④分限[予算]を越す過ちを恥じ、⑤分限内で生活することを楽しみとする。こうなれば、すたれた村を興し、悪習を一洗することができるものだ」。

不確かな情報 「いま、困窮している農民と農業を守るためには減反すればよい」など
とって、簡単に報徳先生のこの上記のようなご遺志を葬り去った現在の農業政策そのものは、いまもって混迷の道を進みつつけています。朝日の社説にあるように、今回の「令和の米騒動」の原因が、米の生産量が需要を下回ったにもかかわらず、お役所が「コメは足りている」と誤った説明を繰り返すなど、根拠に乏しい不確かな情報を発信したことにあるのなら、その責任は重いというべきです。

この「令和の米騒動」といった危急存亡のときに限って、報徳先生のようなすぐれた判断力をもった農事専門の政治家を、現在、手近に一人も持ち合わせていないわれわれ国民は、日々、百年河清を待つ思いでいます。

【2025/08/17 都築正道】